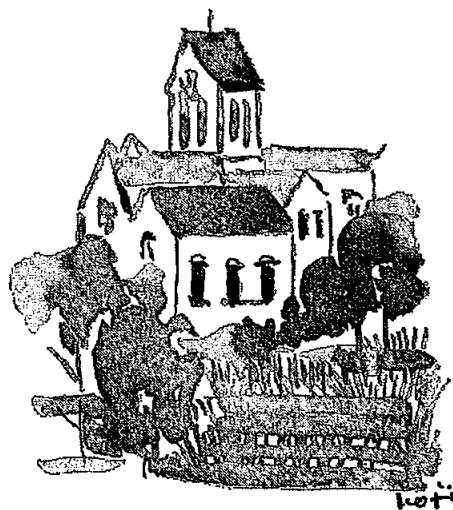


# 新 鐘



第28号 特集・私と早稲田カラー



特集・私とワセダカラー

わたしとわせたカラー	藤堂明保	49
私と早稲田カラー	小口彦太	51
アイとミーとの対話	丹下隆一	54
早稲田放浪記抄	野村圭介	57

論壇

国際法上の個人	島田征夫	2
わが国社会保障制度の史的性格	佐口卓	7
東西交渉史の総合的研究	長沢和俊	12

◆研究発表◆

昨日・今日・明日	英語会	76
ミステリの楽しさ	ワセダミステリー・クラブ	80
手相—その未知なるもの—	手相研究会	84
旅のサークルに思う	名所古蹟研究会	88

北の川・南の川	大矢雅彦	38
グラビア—北の川・南の川		45
ずいそう 私のゼミと雑感	佐藤忠夫	18
就職昔話	小野正	21
趣味談義 あやとり	野口広	31
表紙のことば	坂崎乙郎	23

編集後記  
カッター・鈴木興二(法学部)

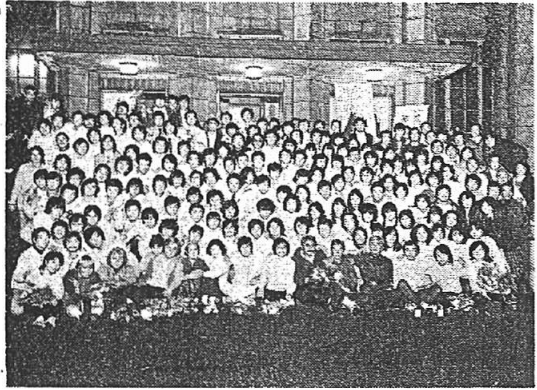
《東と西—古典と人物》	田沼意次	滝沢武雄	66
-------------	------	------	----

《道》	リシユリユー枢機卿	安斎和雄	71
	道	井深大	61

《早稲田の人》	昭和議會史上燦然と	田山見	24
	輝く斉藤隆夫の足跡		

# 昨日・今日・明日

## 英語会



### 英語会の歴史

早稲田大学英語会は、今年で創立七十八年をむかえる大学唯一の公認英語サークルで、現在およそ二百五十名の部員がおり、対内、対外とも非常に活発に活動をおこなっていますが、その設立のいきさつを簡単に述べてみたいと思います。

御存知の通り、早稲田建学の精神のひとつに、「邦語（日本語）をもって教授をおこなう」ということがあります。

これは、外人教授にばかり頼っていた当時の大学教育に対する大隈重信侯のひとつの反骨精神のあらわれであったと考えられますが、それがため、時の早稲田においては、外国語、あるいは語学教育に関しては、いささかの不安がありました。そのことを悟った我々の、はるか大先輩が、現在の大隈会館あたりにあった私邸から散策に出かけようとしていた大隈侯に、学生の手で英語を学ぶクラブを作らせてほしいと直訴したところ、大隈侯が、これで行ってみろ、とポケットマネーの五百円をポンと出してくれ、いわば大隈侯のお声がかかりによって、一九〇二（明治三十五年）にわが英語会が発足したのです。

それ以降、第二次大戦中、ほとんど消えかかっていたのが、戦後現在の会長であられる、商学部教授の伊東克己先生を中心に復興され、昭和三十年代になって、

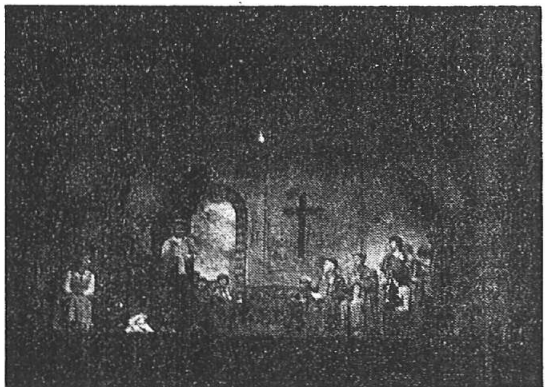
NHKラジオ英会話の講師などで活躍されている東後勝明先生らによって、今おこなっているドラマ、ディベート、ディスカッション、スピーチの四活動体制が整備され今日に至っているわけです。

### 英語会の活動について

以上述べてきましたように、現在、早稲田大学英語会では、主として四種類の活動とそれに参加するための、基礎的な英語の勉強をおこなっているわけですが、その活動について、これから述べてみたいと思います。

#### 一 ドラマ

英語会の活動として真っ先にドラマをとりあげたのは、このドラマが英語会のあるなかで一番長く続けられてきた活動であり、また、会員全員が参加して一つのものをつくりあげるということで、例年その年の活動の集大成となっていて、OBもドラマの公演にかこつけては、一挙に集まってくるからです。我々がおこなっているドラマの活動は現在二種類あり、その一つが、新入生が所属する各ホームミーティング（クラブの人数が多いので一、二年生は住んでいる地域ごとに七つのグループにわかれており、各々をホームミーティングと呼んでいる）単位で参加するドラマフェスティバルで、六



月下旬に、大隈小講堂でおこなっています。このドラマフェスティバルでは、一年生が全員役者として舞台上立ち、英語劇を通して英語の向上、ならびに英語圏の文化、伝統、習慣などの習得をはかると同時に、各ホームミーティングの一年生、二年生が一体となってひとつのドラマを作りあげることにより、協調性を養い、互いの人間関係を深める役割も果たしています。

そしてむかえるのが、英語会のビッグイベントの一つである四大ドラマ。これは、四大学（早稲田、慶応、立教、一橋）英語会連盟の主催する英語劇のコンテストで、昨年で第四十三回を迎えるという

非常に歴史の古いものです。毎年、十一月下旬に開催されるこのコンテストにむかって、ドラマフェスティバルがおおむとすぐ、キャストの選考がおこなわれ、八月の中旬、ろくに夏休みもとらずにリハールがスタートします。それと同時に、スタッフのそれぞれのセクション(セット、サウンド、メイクアップなど)のチーフの面々も、準備を開始します。そして十月のなかばをすぎると、他の活動を終えた一、二年生の会員が、スタッフとしてドラマに参加するようになり、まさしく縁がかりで、一つのドラマ作りが動きだすわけです。本公演は、神田の一橋講堂でおこなわれますが、当日は、ユニフォームのトレーナーを着たメンバー、そしてOBが百五十人近く、一橋講堂に集結し、まさしく壮観の一語に尽きます。コンテストの方は、七十六年より三年連続、慶応が優勝していましたが、昨年度、四年ぶりに早稲田が他の三大学に圧倒的大差をつけて優勝を飾りました。

## 二 ディベート

二番目にディベート活動をとりあげてみたいと思います。ディベートという言葉は、非常になじみがあるかと思いが、もともと裁判の形式から派生したもので、一つの命題(プロポジション)に関して、肯定側と否定側にわかれて、どちらがより論理的で説得力があったか

を競うもので、二人制と五人制、二種類のスタイルがあり、コンテスト形式でもおこなわれています。とりあげられる命題の例としては、「衆議院議員は、比例代表制によって選ばれるべきである」、「原子力発電所は廃止されるべきである」、「日本は輸入制限を廃止すべきである」等々のように、社会的に問題となっていて、しかもどちらの選択をとるべきか、むづかしい問題が命題となります。

我が英語会では、クラブ内でディベートコンテストを開催し、会員にディベートを体験してもらおうとともに、ディベートのリーグにも加盟し、早稲田の名を背負って、華々しい活躍をしております。

ディベートコンテストの最高峰といわれるのが、総理大臣杯をかけて、十一月中旬の地区予選を皮切りに、全国で六十余校の大学が参加し、十二月初旬に決勝の争われる、「全日本学生対抗英語弁論大会」で、この大会において、我が英語会は七回の開催回数のうち、三度、優勝を飾っています。七十五、七十六年、そして昨年七十九年に、三度目の日本一の座を早稲田にもたらしたのです。

このほか、特筆すべきディベート活動として、例年六月初旬に、ハワイ大学の学生を招いて開催している「日米交歓ディベート」があります。この大会は、早稲田校で、ハワイ大生を日本に招き、肯定、否定側それぞれ一試合ずつ、ハワイ

大の学生と対戦するもので、早稲田での会場は大隈講堂を使わせていただいています。ことばのハンディはなかなかのりこえられませんが、第五回を数えた昨年までの対戦成績は、早稲田三勝七敗、慶応は勝ち星なしの十敗となっています。

## 三 ディスカッション

三番目に登場するのがディスカッションで、これは、早い話が英語で会議を開いていると考えていただければ、ほぼまちがいはありませんが、一つの問題をとりあげて、その歴史の変遷、現状分析、プランあるいは解決策といった順序で話します。ディスカッションのスタイルとしては、オピニオン・クエスチョンなどのオーダーが決まっている、フォーマルディスと、自由にしゃべることのできる、インフォーマルディスがあり、我々もクラブ内でディスをおこなうほか、リーグに加盟して他の大学のメンバーと交流したり、二校間でジョイント・ディスカッションをおこなったりもします。特にこと、英語会におけるディスカッションに関しては、関西の大学の方が歴史が古く、毎年四月には、関大、関西学院の二校が、早稲田をそれぞれ訪れて、ディスカッションをし、五月下旬には、逆に早稲田が、関西に足を伸ばして、先の二校や、立命館、甲南といったような大学とテーブルを囲むのです。ディスカッションでとり

## 四 スピーチ

あげられてきたタイトルとしては、エネルギー危機、食糧問題、都市問題、教育問題があげられ、ひろく社会問題全般をカバーしているといえましよう。

最後に登場するのがスピーチで、これは一番なじみのある活動だと思います。我々のやっていることとしては、年二回、春と秋のスピーチ・コンテスト、春は一、二年、秋は全会員が参加し、いずれも参加者は百名を越えます。そして、この大会で好成績をあげたものが、各大学の主催するスピーチ・コンテストに出場します。昨年度は、のべ二十数名の入賞者を出しましたが、コンテストの賞品の方もなかなか豪華で、大学によっては、海外旅行に行けるところもあります。

また、早稲田大学英语会の主催するコンテストとして、「大隈杯争奪全日本学生英語弁論大会」があります。例年、十二月の第二土曜日にひらかれており、全国各地から参加者(昨年は三十五名)を募り、原稿、テープ審査を通過した十二名が、大隈講堂で、それぞれのスピーチを競いあうわけです。昨年は関西学院の代表が優勝し、一昨年の神戸大にひき続き、二年続けて、大隈杯は関西へと渡ったのです。

スピーチの形式は、制限時間五分あるいは七分というのがほとんどで、大学に

よって、審査員から質問がとんだり、その場で、インプロンプト・スピーチを要求されるケースもあります。

トピックとしてとりあげられるものは教育、福祉、学生気質、日本人についてなどが多く、また結論もどうしても似かよったところに落ち着きやすいので、いかに自分の経験やユニークな分析を入れて聴衆をひきつけられるかが、カギとなつてきます。

## 五 その他の活動について

以上述べてきた四活動が、現在わが英語会の活動の中心となっていて、メンバーなら誰しもが経験するものですが、その他にとりあげるべきものとしては、まず基礎英語力の向上のためにおこなっているペイシック・スタディと呼ばれる英語の勉強があります。これは、週に一時分、自分のつごうのよい授業のあき時間を指定すると、その同じ時間帯を選択した者同士がひとつのグループをつくり、三年生がリーダーとなって、日常会話、ヒアリング、ディクテーション、英作文などをおこなうもので、活動に参加し、実際に聴衆の前に立つための基礎的な英語力の向上ならびに各自の英語学習に対しての刺激剤の役割を果たしているといえます。

またそれぞれのホームミーティングでも、二年生が自主的にプログラムを組ん

でスタディをおこなったり、英語だけでしゃべる時間を設けたりもしています。が、他の活動と重なったりすると、まとまった時間がとりにくいこと、またどうしても英語を話すことにテレがついてまわることなどがあって、基礎英語力向上のため、今後考えるべきことはたくさんあると言えます。

次に紹介したいのは、今年で三回目をむかえるハワイ遠征です。これは我々の夢の活動でもあったわけですが、選ばれた約十名の二〜四年の代表が、日本で約三ヵ月勉強し、ハワイ大の学生とディスカッションをしたり、スピーチ・コミュニケーションのクラスの授業を受けたりするもので、一昨年は貿易問題、昨年は極東の安全保障、そして今年が中東からの原油の安定供給について話し合う予定です。今まで二度の経験から、やはり、日本にいたのでは得られないさまざまな体験ができ、また日本とアメリカの学生の立場から、かなり白熱した議論をたたかわすことができました。またハワイの学生は日本についてかなり関心をもっており、来日したいという希望を持っている人もたくさんいました。また、昨年は我がの遠征のウワサを聞きつけたハワイ稲門会のかたが、わざわざ歓迎の席を設けて下さり、ハワイの地で早稲田の大先輩とめぐり合うことができ、一同大いに感激しました。



本年度の代表も先日決定し、四月十五日から二十一日までの遠征をめざし、準備をスタートしたところです。

今までの話で、英語会というのは恐ろしくカタイことばかりやっているクラブだという印象をもたれることと思いますが、実際は、大隈講堂前でエールをきいたり、活動が終わるたびにコンパをやるというお祭り騒ぎの大好きなクラブで、何といってもそれが最高頂に達するの、七月の下旬に一週間、長野県の野尻湖でおこなわれる大夏合宿です。この合宿には、一〜四年、そしてOBも合わせれば三百人近くの人数が集まりますが、一つの旅館を借りきり、最初の三日



間は旅館にカンヅメになって、徹底的に勉強します。この間、英語で生活し、日本語を話した者にはベナルティが科されます。長いスタディが終わると、いよいよたまりにたまったエネルギーを、ボートレース、登山、ハイキング、大エンター大会、焼めし大会、キャンプファイアーなどにぶつけます。この夏合宿は九つの班にわかれて参加し、班ごとにアイディアをこらしたユニフォーム、そして班歌を作ったり、ボートレースの練習をしたりと、ワイワイガヤガヤ、約一ヵ月準備をします。それぞれのイベントは班対抗になっていて、優勝すると審査員の四

年生からスイカがもらえるしくみになっています。なにせ大人数が、一度に集まる活動ですので、真夏の合宿に備えて、旅館との交渉、列車の予約などは、野尻湖が深い雪に閉ざされた二月の下旬からスタートするのです。

### 英語会の組織について

早稲田大学英語会は、組織論の立場からもとりあげられるような、しっかりとしたマネージメントの体制をとっています。今までに述べましたように、一、二年生は、住んでいる地域ごとに分かれ、七つのホームミーティングに属し、ふだんの活動は、ホームミーティングごとに二年が一年を教え、ディベイトなどは、ホームミーティング対抗でおこなっています。このホームミーティングは、人数の多いクラブにおいて、人間関係を深め、互いを向上させるうえで、貴重な役割を果たしています。このホームミーティングにおいて、一、二年生は四つの活動すべてを経験し、三年になると自分の好きな活動をひとつ選んで、そのセクションに所属します。対外的な活動に参加するのは、二、三年が中心ですが、一年生も、新入生対象のディスカッション、あるいはスピーチ、四大ドラマなどで他大学の面々とも交流ができます。

全体のリーダーシップをとるのは、五

役と呼ばれるコミッティート、三年生の幹事が中心です。五役は、幹事長、副幹事長、総務、会計、企画管理から成り、特定のセクションには属さないで、クラブ全体をまとめていく立場にあります。幹事は、各セクションのチーフ、あるいは、大隈杯スピーチ、夏合宿などの実行委員長、加盟しているリーグの委員から成っており、二年生からは、各ホームミーティングのチェアマンがこれに加わります。活動の計画その他、すべて幹事会（全幹事が集まり、月三回程度開催）によって決められます。

ホームミーティングの運営は、二年の手にまかされ、それぞれ役員が決められて、合宿などもおこなっています。

非常にまとまりのつきやすいマネージメント体制なのですが、まだまだタテ、ヨコのつながりを深める余地はじゅうぶんにあるので、積極的な手段をとって、ホームミーティングごとの交流や、学年間の交流をはかっていくべきでしょう。

### 英語会のこれから

七十七年前に結成されて以来、どんなに時が移り変わろうと、我々英語会メンバーの頭の中にあつたのは、「国際人」という言葉でしょう。英語が今やなかば世界の共通語としてあらゆる場所で使われていることは言うまでもありません。

しかし、ただ単に英語が使えるというだけでは、コミュニケーションにはなりませんから、政治、経済、文化などのことに関して、自分の意見を持ち、相手の意見を聞いて、交換できるだけの英語力と知識、教養、問題意識、そして相手と協調してゆける人間性、などが必要となってきました。英語会が四つの活動を中心としておこない、その対象として、社会問題をとりあげているのも、そのへんにねらいがあるからです。

ただし、多様化し、激動する今日の国際情勢において、社会の要求もまた変わりつつあります。ただ単に、英語で社会問題がしゃべればよいというのではなく、さまざまな資格が要求されたり、高度化し、スピードアップしてきたマスキミのシステムに対応していくだけの行動力も必要となってきました。これらの情勢にかんがみて、英語学校などの教育機関も、どんどんふえており、英語会が社会からのニーズに対応できるような人間となれる場として、英会話スクールなどより、より魅力的な存在の場であり続けるためには、今後、解決していくべきこと新しくとり入れるべきことも、またいくつか考えられます。

まず、とかく日本人学生同士の活動にふだんは終始しがちなので、外人、いわゆるネイティブ・スピーカーとのコンタクトを活発にし、英語にもっともって慣

れていく必要があります。国際部との組織的な交流などもとり入れられるべきでしょう。

また活動のタイトル、ドビックとしてあげる問題も、より現実的な、早急に解決が必要なものをピックアップしてやる必要性がでてくるでしょうし、考え方、オピニオンの作り方も、日本的な立場だけでなく、より広い視野をもつことが要求されるでしょう。

また、何といってもクラブの魅力は、その人間関係にあるわけですから、先輩後輩のつながり、あるいは互いのいい意味でのライバル意識をもっと高め、英会話学校にはないものを育てていかなければならないでしょう。

こうした課題が解決された時、単に伝統のうえにのっかっていただけでない、理想の英語会の姿が実現されることと信じています。

		編集		
		後記		

新年度が始まり、例年のようにキャンパスは新一年生でにぎわっている。何となく「初々しさ」といったものがあり、先輩達と見分けがつく。しかし、これもほんの少しの間で、徐々に見分けがつかなくなる。

学生の間では、春の早慶戦が本当の入学式だとよく言われる。授業にも慣れ、環境にも慣れる時期だからであろうか。本誌も丁度この時期に発行されることになるが、新入生諸君にとっては、早稲田をよりよく知るための手がかりとして読んでもらえれば幸いである。

早稲田には、早稲田独自のワセダカラーと呼ばれるものがあって、卒業までにはだれもが、そのカラー、つまり、氣質を持つようになると言われている。しかしながら、これは単純な、Honoraryなものではない。それぞれの個性を尊重するという強い合意の上に成り立っているものである。そしてそれは、創立以来の「心のふるさと」としてのワセダに対する、愛情そのものだと行ってよいので

はないだろうか。  
自分にとつてのワセダカラーとは何か、一度よく考えてみることも必要ではないだろうか。

今回は、編集途中で、不正入試事件という不幸な事件が起きた。全く残念なことである。この事件を真剣に受け止め、一日も早く社会の信頼を回復するよう、努力しなければならぬ。ワセダは、ワセダとしての役割を果していかなければならないと思うのである。

(官崎・露木記)

新 鐘 第二十八号 (非売品)

昭和五十五年五月十五日 発行

編集者 新鐘編集委員会

発行者 久 米 稔

発行所 早稲田大学学生部

東京都新宿区早稲田一ノ六ノ一

印刷所 早稲田大学印刷所

東京都新宿区戸塚町一ノ〇三